

---

# ふたり

柊 雪華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ふたり

### 【Nコード】

N9412P

### 【作者名】

柊 雪華

### 【あらすじ】

「きせき」の後日談。

職場恋愛中の超天然娘・堺朱里と超エリート・緋月智也。それぞれ転勤が決まり、忙しい日々を送っている。そんな二人のまつたりラブなお話。

ほんのりえっちなことを匂わせているだけのぬるーい描写が随所にぬるすぎるので流し読みできるレベルですが、苦手な方はご注意を。

自サイト「こくりこれっど」より再掲載 <http://ameblo.jp/coquelicot>

<http://ameblo.jp/coquelicot>

## 第1章

「おもたいー……」

3月は最も忙しいのに、更に人事異動が重なる時期である。

3月末で転勤が決まっている朱里は、これまでにないほどの多忙な日々を過ごしていた。

unnecessary書類を倉庫に運び込むのだが、もともと体力のない朱里には重労働である。ここ数日で事務所と倉庫を何往復したものか。

倉庫の最も適当な場所に、最も適当なファイルを並べる。

しかしその書類が重いのだ。結果、事務所と倉庫を何度も何度も往復する羽目になる。ともすれば、事務所や倉庫にいる時間よりも廊下で書類を運んでいる時間のほうが多いのかもしれない。

だが、これで、長かった書類の移動は全て終わった。あとは廃棄書類をファイルからはずし、表紙を適当な紙で作って紙ひもでつづるだけである。そうになると、しばらくはこの埃っぽい倉庫にこもらなくてはならない。埃が気管に入り、少し咳き込む。

あと、1週間。ここにいられるのも。

大好きな同僚や先輩、上司。たまに叱られたこともあったけれども、それ以上に皆は優しくかった。

あと1週間が経てば、朱里はもうここでは仕事ができないのだ。同じ建物にはあるが、全く違う部署に移ることになったのだから。

「やだ……なんで泣いてんのかなあ」

自嘲気味に、しかしいつものふんわりした口調を忘れず笑うが、その声は涙声。

大好きな先輩。緋月智也。その名前が頭をぐるぐる回って離れなかつた。彼の笑顔が頭をよぎるたび、涙が出て仕方がなかつた。

そういえば緋月と朱里が付き合い始めたのは、ちょうど去年の今頃。しかも、ここで緋月に告白されたのがきっかけだったのだ。そのときの記憶はまだ驚くほどに鮮明で、今でも「説明しろ」と言わ

れたら詳細に事の顛末を話せるであろう。

「緋月さぁん……」

だからこそ、朱里は泣いているのだ。

大量の書類と、幸せな思い出の詰まった、この場所で。彼の名前を呼びながら。

そんなときに限って、静かな倉庫の内線電話が鳴ったものだから、朱里も驚いてしまう。

「はい、堺です」

涙と驚きを何とか取り繕って、電話に出た。

「2課の緋月です。お仕事お疲れ様です」

「はわっ！あの緋月さん、どうしたんですか？」

もう涙も引っ込んでしまう。好きな人からの電話、まして仕事なのに、泣いているのがもшибれたら恥ずかしいではないか。

「いえ、ちよつと堺さんお忙しいようなので、僕もいくらかお手伝いしようと思ひまして……」

「そ、そんなぁ！緋月さんも忙しいんじゃないですか？」

それは事実である。緋月も今月いっぱい転勤が決まっているのだから。とくに緋月は朱里と違い、かなり離れた部署に転勤になってしまう。そうになると、会いに行くにも車をゆづに縦断することになるだろう。

彼の場合は書類の整理どころか引越しの準備やらなにやらもあり、朱里よりも余程忙しいはずだ。

「僕の方は大丈夫です、一段落つきましたから。じゃあ、今からそっちに向かいますんで」

「え、ひび……」

緋月は最後まで言わずに電話を切った。もう絶対にここに来るつもり、らしい。

「この顔、どーしょ」

涙はおさまったが、目は鬼のように充血してしまい、ちよつと鼻

もぐずぐずする。目の周りが腫れて火照っている感じがする。

(こんな顔じゃ、絶対緋月さん、あたしのこと笑うなあ)

いつだって、初めて知り合ったときからずっと、緋月の行動には「無駄」というものがなかった。倉庫に電話が入ってから3分と経たぬうちに、緋月は倉庫に着く。倉庫は事務所から相当離れているはずだから、相当急いで階段を駆け上ってきたのだろう。

「あれ、結構進んでるじゃないですか」

「はい、あとはこの紙で表紙作って」

緋月は目ざとい男である。朱里の目の腫れにすぐに気づいた。

ああ、この子はさっきまで泣いていたに違いない。そして、自分に心配をかけないように無理して笑っているに違いない。

こんな、他人ならとんでもない勘違い、妄想だと思われそうな思考でも、緋月と朱里の関係であればじつじつまが合ってしまう。

「また無理してますね」

「へ？」

間の抜けた返事をしながらも、表紙に業者の名前を書いていく朱里。まだ子供っぽさを残した丸みのある字。緋月は自分の書く荒削りなものとは正反対の彼女の字が好きだった。

むろん、彼女自身をも。

「去年も泣きそうになってましたよね？」

「だって、あの、あれは……」

「わかってますよ。『朱里』、こっち向いてください」

首を傾げながら朱里は立ち上がる。実際、職場で「朱里」と呼ばれたことはないし、緋月もそう呼ぼうとはしなかった。朱里自身だって、緋月には「職場では職場のつきあい、二人でいるときは二人の付き合い」と何度も言い聞かされているのだから。職場では上司と部下。それ以外の何ものでもないのだ。

「あの緋月さん、なんで今わたしのこと、」

その言葉は緋月の唇に吸い込まれていった。緋月からすれば一瞬のことだったが、朱里には妙に長く感じた。

もともと男性経験の少ない朱里は、まだ手をつなぐことさえ恥ずかしかるほどである。付き合い始めて1年になり、キスも何度もしたし、勿論身体つながりも持ったのに、である。

何をしても恥ずかしそうに目を伏せる彼女が可愛らしくて、見ても触れていても、ひとつになっても飽きない。

「あの、緋月さん。ここ、職場……」

しばらく固まっていた朱里が、ようやくと口を開いた。しかし、急なことでまだ頭の中が整理されておらず、言っていることもどこか端的だ。

「たまにはいいでしょう」

「緋月さんらしくないです。だって、いつも通りにしようって言ったの緋月さんですよ？」

それは事実だ。しかし緋月も男。ましてもうすぐ離れるのだから、じつとしていられるものか、それが緋月の本音。

「僕らしくないって、嫌ですか？」

「嫌じゃないですけど、そんな、わたし……」

まただ。「嫌じゃない」の言葉に緋月が余程気をよくしたらしい。実際、職場で（たとえ倉庫であっても）恋人であることを匂わせてはいけないのだ。

なのに、緋月は遠慮なく朱里の唇を貪る。そう、身体を重ねる前のように。

煙草が微かに香るキスに、朱里は完全に根負けした。しがみついていないと崩れ落ちそうだったから、唇が離れても、必死で緋月の広い背中に腕を回す。

更に気をよくした緋月も、朱里を抱きしめ、日本人形のような長い黒髪に指を通した。

朱里は、いつ見ても綺麗な娘である。「可愛い」と「美人」が違うものだとしたら、朱里は間違いなく「美人」のほうにカテゴライズされる。

更に職員採用試験の成績はトップで、車の免許も持ち、運転もか

なり上手な部類に入る、かなり器用な性質なのだ。

もつとも本人は全然自覚しておらず、どこか舌足らずな口調で、時に常人では思いつかないようなとんでもないことを言う。そのため、よく周囲に「天然」とか「何を考えているかわからない」と言わしめる。そのギャップさえも、緋月は好きなのだ。いや、惚れた理由はまさにそこにあるのかもしれない。

「朱里。好きです」

「ここ、職場です……でも、わたしも好きです」

「ちよつと仕事のこと、忘れてみませんか？」

「え」

そう、もう一度言おう。緋月の行動には無駄がないのだ。勿論朱里のスーツのジャケットを脱がす手つきにも無駄がない。

「あの緋月さん、だから今、仕事……」

「気にしちゃいけません」

人が来る可能性はあるのだが、内側から鍵をかけた。鍵だつて朱里が持っているし、そもそもマスターキーも緋月がこっそりと持ち出していた。あの小さな事務所ではそんなことは造作もないのだ。

「でも、でも……」

「冗談ですよ」

ちよつと哀しそうな微笑みで、緋月が身体を離す。そしてどうにか体勢を整えた朱里は、仕事を再び始める。静かな時間。この階には倉庫しかないから、本当に静かだった。倉庫には時計もない。時々、誰かが倉庫の前を歩く足音がするだけである。

「なんでやめたんですか？」

「忘れちゃいけませんよ、『職務専念義務』」

「そうですね……ごめんなさい、なんかわたしばかり」

「僕だつて抑えきかなくなるところでしたよ……さて」

緋月も紺のスーツの埃を払った。

「本当に、手伝うことないんですね？」

「ないですけど……一緒にいてほしいです」

顔を真っ赤にして言う朱里に、さつきとは違う意味で気をよくした。素直な恋人ほど可愛らしいものはない。

「しょうがないですね」

でもさほどしょうがないわけでもなさそうに言う。

「一緒にいることが僕の仕事、ってわけですか？」

「……はい」

緋月は性格上恥ずかしいことでもさらっと言えてしまうタチだが、朱里は違う。緋月のちょっとした言葉にさえ顔を赤らめるのだ。

手持ち無沙汰だったから、とりあえず緋月は作業機の隣の席に座らせていただいた。朱里の仕事振りは熱心で気が利いて、非常によいものである。しかし、そのどこか抜けたようなドジ属性が災いし、職務にたいした影響のないようなちょっとしたミスは時々ある。そこがまた、彼女らしいといえればいいのだが。

「朱里。僕、辛そうに見えますか？」

何ともなしに聞いてみる。

「うーん……」

手を止めて考える朱里。緋月と作っている表紙を交互に見比べ、

「全然そう見えないです。だって緋月さんですしー」

などと、根拠のない理由つきで答える。

「あの……僕だって人間ですよ……ん？」

苦笑しつつも、かかってきた内線電話を取る。普段は鳴らない電話だが、この時期は倉庫に閉じこもって仕事をする人間が多い。まして朱里と緋月が所属しているのは、20人弱の小さな事務所である。担当がいなくてもどうにもならないときは呼び出しをかけるてはいけない。

「はい、2課緋月です」

「あ、緋月さんですか？総務課の下田です。不動産取得税の減額のことでお客様がいらしてるんですけども」

「わかりました、すぐ行きます」

電話を切り朱里のほうに向き直ったかと思うと、緋月はさっさと

ドアに向かつてしまった。

「ちょっと呼び出しがかつたんで、僕事務所に戻ります。今日仕事終わったら僕の部屋に来て下さい」

ドアの方から緋月の声がした。返事をする間も与えられず非情にドアが閉まる。最後まで、彼の辞書には「無駄」の二文字はないのだ。

どこか今日の緋月は冷静さを欠いていた、気がする。

そう思いながら、朱里はロツカールームで赤いコートを羽織る。

普段の緋月なら絶対あんなことはしない。

何度も倉庫で二人きりになったけれど、今回のようなやましいこと（最後まではしていないのだが）はしたことがない。緋月は「理性的で理知的な紳士」なのだから。朱里も緋月のそんなところに惹かれたのだから。

3月末とはいえど、まだ寒い。朱里は自分の名のように赤いコートを羽織って外に出た。

朱里は赤が好きなのだ。自分の名前にも「朱」の字があるからではないが、コートも赤だし、持っている小物も赤が多い。そういえば「緋月」の「緋」も、色合いは違うが赤だ。同じ色の名に惹かれて緋月と朱里は出会ったのか。

まさかそんなことないよねー。

変にロマンチックなことを考えてしまった。こんなこと考えてる暇などない。どうせ緋月より早く部屋に着くのだから、何か料理の一つでもつくろうではないか。さっき緋月は時間外勤務届を出していたから、遅くにならないと帰ってこないだろう。

アクセルを踏むと、朱里の白いインテグラは彼女の纏う雰囲気似合わず颯爽と走り出した。

一人暮らし歴2年の彼女は、料理も達人だ。いつものように、とありあえず冷蔵庫を覗いて、あるもので料理を作ってしまう。

しかし、仕事は完璧なのに料理オンチな緋月である。あるものといつても限られているので、せいぜいいつも肉じゃがやらカレーあたりを作る。勿論今日も肉じゃが。緋月は朱里の作る肉じゃがが好きだから。

緋月が帰ってきたのは夜10時を過ぎた頃。周りの後片付けや事務引継ぎでもしていたのだろう。その瞳には疲れが見え隠れしていた。

「あ、緋月さんお疲れ様です」

「もう仕事終わったんですから、そんな言い方しなくてもいいですよ」

苦笑する緋月。紺のコートと背広を脱ぎ、クローゼットのハンガーにかける。クローゼットも部屋も恐ろしく整頓されていて、掃除や整頓の苦手な朱里はいつものことながら感心した。

「それに明日休みですしね。家のことがゆっくりできるように今日でやることはほとんど片付けてきました」

「あの、じゃあ緋月さんも仕事終わったんですから敬語は……」

「前も言ったでしょう。僕はこの喋り方じゃないとダメなんですよ」  
「もともと少し緩めていたネクタイを更に緩める。朱里は彼のこの仕草が好きで、いつも食い入るように見てしまう。」

「……僕、どこがおかしいですか？」

「そうじゃないんです、あの、えと……緋月さんがネクタイ緩めるのってかっこいいなって」

わずかに顔を赤らめて言う朱里に、緋月は微笑む。いつもの穏やかな笑みで。

「何言ってるんですか。本当に、朱里は……」

## 第2章 + あとがき (前書き)

「ふたり」第2章です。ほんのり、そしてぬるすぎるえっちな描写もありますが、そこまできつくないというかもものすごいほかしています (年齢制限をしないでいいレベル) ので気にしないでどうぞ。

## 第2章 + あとがき

洗い物も終わったところで時計を見たら、夜の11時になっていた。緋月が風呂につかっている間。朱里はただ時計を見ていた。

あと1時間で日付は変わり、一緒にいられる時間がまた短くなる。実際彼の部屋はもうほとんど引越しの準備が整っていて、がらんどうになっていた。折りたたみベッドはすでにたたまれ、床にそのまま布団を敷いている感じだ。

朱里は先に風呂を使わせてもらい、布団の上にちよこんと座って緋月があがるのを待っている。

「もうこうしてられないんだー……」

抱えていた膝を、抱き寄せるように力をこめた。両膝に両目があったり、いつも緋月の部屋に置かせてもらっていた、お泊り用のネグリジェに涙がしみこむ。いなくならないでほしい、なんて言えない。転勤は彼女たちにとって宿命だから。

本来は緋月も去年転勤になるはずだったのだ。しかし朱里のために残ることを選んだ。今年はまだそれができない。朱里は朱里で同じ庁舎の別な部署に転勤だ。

「朱里？」

すっかり「恋人の顔」になった緋月が、バスルームのドアを開ける。

「はわ、緋月さんもういいんですか？」

「僕あれ以上入ったら倒れますよ」

確かに緋月の顔はほんのり赤みをさしている。もともと長風呂ができない夕子なのだ。

「すみません、待たせてしまいましたね」

「緋月さんお風呂短いから大丈夫ですよー」

整った顔がヘラヘラと笑みに崩れる瞬間。緋月は思わず朱里を抱きしめていた。

「ほえ、え、あの」

「少しだけ、このままでいさせてください」

いつになく切羽詰った様子の緋月に、抗えない。

朱里が入れた入浴剤の、甘いラズベリーの香り。濡れた緋月の髪が頬にはりつく。それさえ朱里には愛しい。抱きしめられると、緋月の体温を誰より近くで感じられるし、愛されているという実感がわくので、朱里はこうしているのが大好きだった。

「僕だって、寂しいんですよ」

そつと、名残惜しそうに身体を離し、でも朱里の両肩に手を置いたまま、珍しく泣き出しそうな困ったような表情で緋月が言った。そんな瞳に見つめられたら、朱里はもうどうしようもなくなってしまう。自分だって泣きそうなのに、苦しいのに。

「言っただでしょう、僕も人間だって。朱里を手放して転勤なんて、本当は僕だってしたくないです」

「わかってるけど、わたしも寂しいです。だってもうこうやって緋月さんと一緒にいられないんですよ？会いたいときに会えないんですよ？」

涙は絶対流したくない、朱里は泣く代わりに緋月にぎゅっとしがみつく。それはもう、隙間がないほど、しつかりと。

「朱里。日曜まで帰らないで、ここにいて」

緋月の話し方が変わった。それほどに切実に、緋月は朱里を欲していたのだ。

「でも着替えとかは……」

「僕のを着ればいいから」

朱里の言葉を制する。もう時間がない。

「緋月さんのシャツとか？」

「そう。一回も見たことないから」

「なんか狙ってたりとかしないですよねー？」

口調はふざけているが、その実お互い真剣である。

「離れたくないです」

「僕だつて」

「じゃあ朝までこうしててください、緋月さん」

「僕の理性が持つかどうかにかかっているけど」

「そーいうことしてもいいしなくてもいいです。だって緋月さんとかくっついていられるんならわたしはどっちでもいいですから」

枕元に置かれた部屋の明かりのリモコンを操作し、明かりを消した。真つ暗な部屋。でも隣には大切な人がいる。体温と鼓動、そしてその肌のあたたかさでわかる。

性的な意味をはらまない「抱き合う」。こうしているのが今の二人にとって一番だつた。

「明日の朝わたし裸だつたら怒りますからねー？」

「怒れないくせに」

「じゃあするんですか？」

「朱里が寝てからじゃないとわからないですね。朱里いつも僕より先に寝るから」

他愛無い会話さえ、大切にしたい。抱き合っている腕が痺れても、離れたくない。

「ひづきさん、好きですう……」

どれくらい時間がたったのか。うわ言のように呟く朱里はすでに眠りに落ちていた。寝言でもなお自分に愛の言葉を言ってくれる、10歳以上年下の恋人があまりに愛らしくて。

「仕方ない子ですね」

普段は子ども扱いすると朱里は怒るから、今だけこんなことを言う。

「でも、僕も好きです」

寝息を立てる朱里の唇に、そつとキスをして。

「神様」なんてものは、緋月は信じない。

けれどもし「神様」がいるのであれば、この子をずっと手元にお

いて、そばにおいて離したくない。この子の、全てを。離さない。ずっと、ふたりで。

そう「神様」に願っていたと緋月は思う。

こんな顔、朱里には見せられない。

すっかり熟睡している朱里を更に抱き寄せる。枕に緋月の涙がしみこんだ。大学以来久しぶりに「恋愛」というものをしたように思えたのは、朱里がいるから。こんなにも「離れたくない」と思ったのは、他の誰でもない、朱里だから。

とつくに日付は変わり、一緒にいられる時間もまた減った。相変わらずの無邪気な寝顔。でも日中は、多少ドジなのを除けば仕事もよくできる、真面目な子。自分だけが知っているそのギャップが愛しくて仕方ない。

「なんでこんなに無防備なんですかね。『僕も男だ』って何度も言ってるのに」

ちよつとため息をつき、もう一度キスをした。さっきの軽いものとは違うもの。

「う……ん」

多少反応はあるが、起きる気配はまだない。

たまにはこういうのもいいかもしれない。

ふと微笑して、でも手は止めない。止めたくなかった。

次の日も、緋月のほうが早く目を覚ました。ゆづべと違うのは、直接に肌が触れ合っているということ。

「ん……………」

続いて目を覚ました朱里だが、寝起きではいつものぼんやりが更にグレードアップし、状況を飲み込むのに時間がかかる。

「ほえー……………これ、なんですかー……………」

「覚えてないんですか？朱里」

わざと意地悪く聞いてやる。

「なんのことですかー……？」

やはり、ゆうべのことは寝ぼけていたため覚えてないらしい。緋月はゆうべ自らが何をしたか、彼女が緋月の腕の中でどのような反応をしたのか、朱里の耳元でつぶやくように、事細かに教えてやった。

「すごかったですよ、朱里。いつもは恥ずかしがってばかりなのに、ゆうべは自分から……」

「キヤーツ！いいです、もういいですー！」

やっと脳みそも起床し、状況が飲み込めたらしく、朱里は一気に頬を染め、そっぽを向いてしまう。

「ダメです。僕はよくないです」

逃げ出そうとしたばたする朱里を、後ろから抱きすくめる。大好きな人のぬくもりに、朱里は思わず震えた。震えたのは怖いからじゃないし、性的な快感が強すぎたからでもない。急にこんなことをされて、ドキドキして仕方ないからなのだ。抱きしめられるのは不慣れだ。ましてこんな格好で。

「覚えてたいんです、忘れたくないんです。全部」

「で、でもこんなあ……！」

「僕的事、嫌いですか？」

この一言に朱里が弱いのを、緋月は知っていた。

「嫌いじゃないですけど、その、えっと」

「恥ずかしがらなくてもいいのに」

腕の中で固まっていた朱里が、落ち着いてきたのかだんだん身体のかわばりをゆるめていく。

「ほら、力抜けてきたじゃないですか」

「……だめですか？」

「だめじゃないですよ」

ちよっと恥ずかしいけど、穏やかな時間。ありきたりな気持ちだけど、ずっとこのままでいたい。朱里も、緋月さえもそう思っていた。

3月31日。

一見いつものように皆仕事を片付けているのだが、この日ばかりは違う。転勤になる者はデスクの片づけにも、役付の者への挨拶にも追われることになるのだ。

「水産事務所の総務ですか。くれぐれも身体には気をつけて」

「はい、2年間お世話になりました！」

時間にして、ちょうど午後1時半を少し過ぎたところ。所長への挨拶を終え、所長室から事務所内に戻る朱里。事務引継ぎも終わってしまったので、あとは身の回りの整理しか残っていない。

ふと緋月のデスクのほうに目をやると、緋月は鞆に書類やら何やらを詰め込んでいた。

「あれ、緋月さんもう帰るんですか？」

緋月の向かいの席にいる相川が尋ねる。相川はまだこの事務所のこの課にしていることになっている。

「ええ、向こうの方で事務引継ぎを早めにしたとのことでしたから」

勿論朱里がそれを聞き逃すはずはない。付き合い始める前から、つまり片想いするときから、朱里は緋月の声が聞こえるとそっちに集中してしまっていた。緋月から仕事を頼まれるとそれだけで嬉しかった。

それが、もう全て、思い出になってしまふ。

「お先に失礼します」

緋月は朱里より早く所長クラスへの挨拶を終えていたので、もう帰ってしまう。もうずっと、緋月に会えなくなってしまふ。

「お疲れ様です」

他の所員がそう返している間に、朱里は勢いよく立ち上がった。ゆるやかにウェーブを描いた朱里の長い髪が揺れる。所内用のサンダルを履いたままなのも忘れて、朱里はまだ雪解け水の残る、でも前よりもあたたかくなった庁舎の外に出た。

「……堺さん」

そこでの緋月は職場の顔、当然だ、ここは職場なのだから。

「だって、もう……」

「ちよっと、堺さん」

職場であることを忘れて必死ですがる朱里を、あっさりとしたしなめる。もつともその表情には叱責する様子などなく、笑みさえ見えたが。

「貴女、何のために車持つてるんですか？」

「……あ」

そうである、緋月は最近買った新型の黒いアコードを、朱里は例のインテグラを持っていて。県を縦断するにはお互い十分すぎるほどの車だ。

「確かに今までみたいには会えなくなりますが。でも、その分濃い時間がすごければいいと思いませんか？」

「……あ」

気づいて、朱里は緋月の紺のスーツのジャケットから手を離れた。堺さん、最後までどっか抜けてますね。……ま、そこがいいんですけど」

ぼんと頭を撫でられると、僅かに朱里が頬を膨らました。

「子ども扱いしないでください。わたしこれでも21歳なんです」

「わかってますって。……じゃ」

「はい、緋月さん、お元気で！」

びよこんと一礼して、緋月を見送った。

涙は見せない。だって、また会えるんだから。すぐにじゃなくてもいい。この人なら、信じられる。そう思っているから。

二人はそういう意味では、年齢に似合わず、どこまでも純粹で一途だった。

性格的に純粹すぎてすぐに騙されたりなどしてしまう朱里。一見世間にもまれてひん曲がった根性のようだが、実はすっかり朱里の

虜になっていた緋月。お互いに、これが最後の恋だと、そう思っていた。そうあってほしかった。

お互い新しい職場に移ってからは、慣れない仕事に戸惑いつつも、二人の共通点である物覚えのよさを生かしていた。新しい職場でも、「よくできる人だ」という印象を焼き付けたのだ。

もっとも朱里には、例によって「天然」というオマケもついてきたのだが。

そして週末、朱里がインテグラを、緋月がアコードを走らせる。会えないわけではないのだ。この車を走らせれば、愛する人が待っている。

そう、だから、これからもずっとふたりで。

いつしか、朱里の左手薬指にはダイヤモンドの指輪が光るようになっていた。

## 第2章+あとがき(後書き)

正直に言いましょう。

このシリーズなんですが、実は理想の男性像を形にしたい、それだけのために書きました(キツパリ)

頭がよくて冷静沈着、でも恋人にはとことん甘い男性。ああ素敵。ストーリーもへったくれもなく好みの赴くままに文章を書き上げてみましたが、いかがなものでしょうか。

こんな男性、いたら素敵だと思いませんか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9412p/>

---

ふたり

2011年4月27日19時11分発行